

忘れられない日

平成6年11月7日。悦子さんは、範義さんの単身赴任先である大分県にいました。範義さんに会いに、掃除や洗濯などのお手伝いをするために、熊本と大分を何度も往復していた悦子さん。いろんなことが重なり、疲労もピークに達していました。その日の朝、食事の支度をするために台所に立った悦子さんは、軽い目まいを感じ、床に倒れこんでしまいました。しかし、悦子さんはすぐ起き上がり、再び支度を始めました。—と想像していたのは、悦子さん本人だけでした。数分の間、意識がなかったといえます。それが脳梗塞の始まりだったのかもしれない。

範義さんも心配していましたが、悦子さんは「大丈夫、大丈夫」と気丈に振る舞い、範義さんを仕事に行かせ、その日はずっと部屋で寝ていました。

悦子さんは、数年前から高血圧の兆候があり、定期的に病院に通っていました。悦子さんの体調が悪かったので範義さんは、熊本にいる娘さんに「熊本に連れて帰ってほしい。そして病院行って薬をもらってきてほしい」と頼みました。娘さんは、薬をもらうために、かかりつけの医者

しかし悦子さんの状況を聞いた医者は「今すぐに救急車を呼んで病院に連れて行ってください」と言います。状況は決して良くはなく、緊急を要するものでした。急いで範義さんは救急車を呼び、悦子さんは大分の病院に搬送されました。それは、症状が出てからすでに1日が過ぎようとしていました。

左半身にまひが

診断の結果、右脳の脳梗塞が見つかり、即入院することになりました。家族の献身的な支えと治療により、命は助かりました。しかし、左半身にまひが残りました。利き腕が右手だったのでまひに気付くのに時間が



かかってしまいました。自分の体が自分では無いような感覚が襲ってきます。後悔と絶望がぐるぐると頭の中をめぐりました。家族も心配していました。心配する娘たちに範義さんは「心配するな」ときっぱりと自信を持って言いました。それは30年間の関係があるからこそ言える信頼の言葉です。家族も悦子さんの回復を願い、応援しました。悦子さんの気持ちを考えてか、多くを語らなかつた範義さんは、悦子さんをずっと見守り続けました。

目標を一つずつ

そして1カ月間、大分の病院で入院治療を受けました。治療が終わり、退院することになり、熊本に帰って、熊本リハビリテーション病院に転院してリハビリをすることになりました。これから、長いリハビリ生活が始まるのです。ベッドで寝ているだけで何もできないことにふがいなさを感じ、気持ちが落ち着きません。でも悦子さんは、ピンチをチャンスに変えます。「トイレさえ一人で行けないんだったら、自分で行けるようになる」と目標を立てて頑張りました。最初は車いすで、次は、つえをつきながら、最後は歩いて：少しずつ目標を大きくしながら希望を持ち続けました。

それでも夢と希望は捨てなかった

脳梗塞で倒れた釜田悦子さんは、左半身にまひが残ります。それでもあきらめませんでした。強い心と好奇心が、悦子さんを前に、進めます。



↑身体障害者の会女性部では、週2回活動を行っているエコクラフトや洋裁、編み物など、多彩な活動を行う

努力は報われる

命は助かったものの、左半身のまひがあり、歩くことも左手でもものをつかむこともできなくなってしまう悦子さん。でも3人の子どもたちが嫁ぐまでは絶望なんかしてはくれません。ひたすら前に進むことを目指します。

リハビリは楽ではありませんでした。泣きたくなることもありましたが、でも絶望しつづくとベッドで泣いている人を見ると「泣いてなんかいられない」と考えるようになりました。子どもの頃から努力だけは負けませんでした。その努力でリハビリを続けていこうと思ったのです。

入院後「左手は諦めてください」と言われていた悦子さんにリハビリの先生は「そんなことはない！だったら私が治してあげる」と言ってくれました。諦めないことを教えてくれたのです。それから16年後の昨年、悦子さんの左手には握力が戻ってきました。「努力が報われないこ



↑壁一面に張られた6人の孫の写真は悦子さんの心を癒してくれる



↑できあがったときの達成感は悦子さんの生きがいになっている（エコクラフトバッグ）

INTERVIEW

「できない」と言わない努力の人

私は学生の時の実習で釜田さんに出会い、それからのお付き合いですが、とにかく努力とチャレンジをする方なんです。「できない」って言わず、自分で今できることを見つけて、できることをする方です。釜田さんの意欲とチャレンジはすごいんです。エコクラフトをリハビリに取り入れてからも、いろんなやり方を提案され、リハビリの仲間にも体験からのアドバイスをしてくれるんです。「(手が)使えんけん使わんだらうけど、使ってみらんと使えんよ」って言われるんですが、それは自分で頑張ってるんだからだと思っています。

私たち作業療法士は、「お一人お一人のやりたいことを見出し、それを支えたい」と思って仕事をしています。これからもその人らしい生活ができるように支援を続けたいですね。



よしかわ かよ 吉川桂代さん

熊本リハビリテーション病院 作業療法士



→料理だけでなくお菓子作りも楽しむことでリハビリになる（炊飯器でつくるケーキ）

とはない」。悦子さんの努力から教わったことです。それは今、病気でリハビリをしている人たちの希望にもなるのでしょう。

人生に無駄はない

悦子さんのリハビリにとって家族はとても大きい存在でした。洗濯や炊事などもやってあげるのでなく、悦子さんにさせるのです。やってあげてはいつまでたっても体は良くなりません。範義さんと娘さんは断腸の思いで手伝うのを我慢していたのでしょうか。それが本当の思いやりなのです。その娘さんは、結婚するときに「母の頑張りには本当に尊敬する」と手紙を読んでもくれたそうです。家族は、悦子さんを誇りに思っていました。

リハビリでやっていったエコクラフトや料理なども子どもの頃に好きだった図工や家庭科の影響があるのでしょうか。楽しんでやることができました。苦にならなければリハビリも楽しくなります。無駄なことなどないのです。

悦子さんは「これからいつまで生きられるか分かりませんが、元気に生きていきたい」と話します。「病気になるって人への思いやりが強くなったから病気に感謝しているんです」と笑顔を見せます。

人生のすべてが絡み合っている現在があるのです。悦子さんの人生から人が生きることの素晴らしさを教わりました。